２０２５．２．１６（日）使徒２２：１～１１

22:1 「兄弟ならびに父である皆さん。今から申し上げる私の弁明を聞いてください。」
22:2　パウロがヘブル語で語りかけるのを聞いて、人々はますます静かになった。そこでパウロは言った。
22:3　「私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。
22:4　そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。
22:5　このことについては、大祭司や長老会全体も私のために証言してくれます。この人たちから兄弟たちに宛てた手紙まで受け取って、私はダマスコへ向かいました。そこにいる者たちも縛り上げ、エルサレムに引いて来て処罰するためでした。
22:6　私が道を進んで、真昼ごろダマスコの近くまで来たとき、突然、天からのまばゆい光が私の周りを照らしました。
22:7　私は地に倒れ、私に語りかける声を聞きました。『サウロ、サウロ、どうしてわたしを迫害するのか。』
22:8 私が答えて、『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、その方は私に言われました。『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである。』
22:9　一緒にいた人たちは、その光は見たのですが、私に語っている方の声は聞き分けられませんでした。
22:10 私が『主よ、私はどうしたらよいでしょうか』と尋ねると、主は私に言われました。『起き上がって、ダマスコに行きなさい。あなたが行うように定められているすべてのことが、そこであなたに告げられる』と。
22:11　私はその光の輝きのために目が見えなくなっていたので、一緒にいた人たちに手を引いてもらって、ダマスコに入りました。

＜説教＞

エルサレムの神殿にいたパウロは、アジアから来たユダヤ人たち及び彼らによって扇動された群衆によって捕らえられ、殺されそうになりました（21:27−31）。ローマ軍の千人隊長が兵士と百人隊長たちを率いて駆けつけ、取り敢えずパウロを捕らえ、事情を調べようとし、パウロを兵営に連れて行くように命じましたが、その間も群衆がパウロに暴行しようとし、殺せと叫びながらついて来たので、兵士はパウロを担ぎ上げて兵営の中に連れ込もうとしました（32−36）。しかしパウロはギリシア語で千人隊長に語りかけ、群衆に話をする許可を得て民衆に向かって静かにするよう手で制し、やっと静かになった民衆に向かってはヘブル語で語りかけました(37−40)。それは民衆がユダヤ人だったからです。

とは言え、殊に、キリスト･イエスを信ぜず、パウロを嫉み憎み、殺そうとしているユダヤ人たちが今更パウロの話すことを素直に聞き入れることは期待できなかったでしょう。しかし彼らが聞いても聞かなくても、パウロはどうしても語らなければなりませんでした。そんな人々に対してもパウロは「兄弟ならびに父である皆さん。今から申し上げる弁明を聞いてください。」とへりくだって丁寧に語りかけ、話を始めました(1−2)。

パウロがどうしても〈弁明〉し、語らなければならなかったことはどういうことだったのでしょうか。それは、以前の自分がどれほど熱心に自分が信じる道を突き進み、それこそが神のみこころにかない、神に喜ばれ神に仕える道だという確信に凝り固まって突進していたかということ。そして、しかし実はその道は神のみこころと正反対であり、神に真っ向から立ち向かうものであり、イエスを迫害するものだった故に、イエスによって自分は打ち倒され、粉々に砕かれたこと。しかもそれで終わりではなく、自分がキリスト･イエスにあって新しく造り変えられ、しかも今度はキリストに仕える者とされたという神の深いあわれみ、限りない恵みのこと。それを語らなければなりませんでした。パウロの〈弁明〉は、自分の身を守ったり、面目を立てたりするための言い訳、言い逃れ、ごまかしなどではありませんでした。自分がいかに間違っており、罪深い者であるか、その一方で神が、イエスがいかにあわれみ深く恵み深いお方であるかということの現実、事実の証しでした。要するに、イエス・キリストについて、イエス・キリストのための弁明でした。

パウロが以前、どれほど〈神に対して熱心な者〉(22:3)だったか、それが 3−6 節に記されています。パウロは、自分は以前エルサレムで「民全体に尊敬されている律法の教師でパリサイ人」(5:34)の〈ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け〉ており、それ故ユダヤ人としての神に対する熱心さは〈今日の皆さんと同じ〉だと言いました(3)。〈この道〉(4)は、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」(ヨハネ 14:6)と言われるイエスをキリストと信じ、従う道です。そう告白する〈男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました〉。パウロは以前〈ステパノを殺すことに賛成していた〉(8:1)ことを特に思い起こしていたことでしょう。かつてパウロを含むユダヤ人たちに対してステパノが「兄弟ならびに父である皆さん、聞いてください。」と言って弁明を始めたのでした(7:2)。「ステパノを死に至らせた罪責が自分にある。そして今は自分がそのステパノと同じ立場に立たされている。」との思いがこのときのパウロには特にあったことでしょう。しかしパウロが過酷なまでに迫害し、ときに死にまでも至らせた人々はステパノだけではありませんでした。自分が過去に犯し、積み上げて来た罪の大きさとその責任をパウロは決して忘れはしませんでした。たとえそれが当時自分が熱心に信じていた道だったとしてもです。ましてや自己正当化、美化など絶対にしませんでした。それは客観的に見てもできまでんでした。パウロが熱心に信じ、していたことは〈大祭司や長老会全体も〉(5)知っている、隠しようのない事実でした。そんな以前の自分の姿は、そして、そこまでは〈今日の皆さんと同じ〉道を歩んで来たとパウロは認めるのでした。

しかし、その先に大どんでん返しが待っていました。否、主イエス・キリストご自身が待ち構えておられました。パウロの罪を露わにし、パウロの信念も自信も高慢も粉々に砕きなさいました。そして新たに造り変え、それまでとは別の、正反対の道を行かせるために主イエス・キリストがパウロの前に現れ、語りかけ、なすべきことを教え、命じてくださったのです(6−10)。この出来事は既に 9 章に記されていましたが、ここではパウロ自身が語った言葉として記されています。それぞれ言葉（文章）の違う点が何カ所かありますが、主イエス・キリストによる、パウロへの一方的なあわれみ、恵みのみことば、みわざだったことは同じです。パウロに対する神のみこころ、ご計画が、神のときに行われたことは全く同じです。

それでも幾つか見ておくと、〈ナザレのイエス〉(8)と主がわざわざ言われたのは、それが特にパウロたちパリサイ派律法学者によるイエスへの蔑みの言葉、いわば「あだ名」のようなものだったからでしょう。ここでは確かにパウロはエルサレムの、律法に厳しい、神に対して熱心なユダヤ人たちに対して語っていました。また、「サウロ、サウロ」と主は呼びかけておられたことからしても、イエスのはっきりとしたことば(7,8)は自分にしか聞き分けられなかったことをパウロは言っているのでしょう(9)。10 節も同じです。パウロは特別に自分にだけ語られたのだと分かったので「私はどうしたらよいでしょうか」と主に応答し、それに主が答えてくださいました。9 章で学んだときにも考えましたが、イエスはパウロを地に倒れさせました。つまりそれまでの自分の熱心、信念、自分が良いと考えていたやり方、では立っていられない、つまり生きていられないようにイエスはパウロになさいました。自分はこれで熱心に一所懸命に神を信じて生きている、やっている、神に認められて当然だというパウロの自己義認、自己正当化をイエスは粉々に砕いてしまわれました。そうやってパウロの罪深い性質、「古い人」「肉」「自我」をイエスが殺されたのです。そんなパウロが再び生き、「起き上がり」歩みを始めるには、パウロの力では無理でした。「起き上がりなさい」(10)という主の命令のみことばが絶対に必要でした。「ダマスコに行きなさい」もそうでした。そこでは主イエスによって「あなたが行うように定められているすべてのこと」があると言われました。キリスト者たちを捕まえてエルサレムに引いて来ることではなくなったのはもはや当然でしたが、ではその代わりに何をするべきか、それはまた自分で考えろというのではありませんでした。主がお定めになった道がある、ということでした。

私もパウロのように、というよりも、主イエスがパウロになさってくださったように、自分勝手な私を主があわれみ、みことばを語りかけてくださり、私の古い人を砕き、死なせ、新しく造り変えてくださるようにと願います。その主と主のみわざに信頼し、期待して、主に応答して、私自身のこれまでの、そして今の在り方、生き方を顧み、悔い改めて主によって定められた、主のみこころにかなう歩みをしたいと願い祈ります。